

トロツコ

芥川龍之介

青空文庫

小田原熱海間あたみに、軽便鉄道敷設ふせつの工事が始まったのは、良りよう平へいの八つの年だった。良平は毎日村外はずれへ、その工事を見物に行つた。工事を——といったところが、唯ただトロツコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

トロツコの上には土工が二人、土を積んだ後うしろに佇たんでいる。トロツコは山を下くだるのだから、人手を借りずに走つて来る。煽あおるように車台が動いたり、土工の袷は天てんの裾すそがひらついたり、細い線路がしなったり——良平はそんなけしきを眺ながめながら、土工になりたいと思う事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロツコへ乗りたいと思う事もある。トロツコは村外れの平地へ来る

と、自然と其^{そこ}処に止まつてしまふ。と同時に土工たちは、身軽にトロツコを飛び降りるが早いか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロツコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのである。

或^{ある}夕方、——それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロツコの置いてある村外れへ行つた。トロツコは泥だらけになつたまま、薄明るい中に並んでいる。が、その外^{ほか}は何処^{どこ}を見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人の子供は恐る恐る、一番端^{はし}にあるトロツコを押しした。トロツコは三人の力が揃^{そろ}うと、突然^{とつぜん}ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひ

やりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。ごろり、ごろり、——トロツコはそう云う音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行つた。

その内にかれこれ十間けん程来ると、線路の勾こう配ばいが急になり出した。トロツコも三人の力では、いくら押しても動かなくなつた。どうかすれば車と一しよに、押し戻されそうにもなる事がある。良平はもう好よいと思つたから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう！」

彼等は一度に手をはなすと、トロツコの上へ飛び乗つた。トロツコは最初おもむ徐ろに、それから見る見る勢いきおいよく、一息に線路を下りくだ出した。その途端につき当りの風景は、忽ちたちま両側へ分かれるよう

に、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当る薄暮はくぼの風、足の下におど躍るトロッコの動揺、——良平は殆ど有頂天うちようてんになった。

しかしトロッコは二三分の後のち、もうもとの終点に止まっていた。「さあ、もう一度押すじやあ」

良平は年下の二人と一しよに、又トロッコを押し上げにかかった。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等うしろの後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこう云う怒鳴り声に変わった。

「この野郎！ 誰ことわに断つてトロコさわに触った？」

其処には古い印しるし絆ばんてん天てんに、季節外れの麦藁帽むぎわらぼうをかぶった、

背の高い土工が佇んでいる。——そう云う姿が目にはいった時、

良平は年下の二人と一しよに、もう五六間逃げ出していた。——
それぎり良平は使の歸りに、人気のない工事場のトロツコを見て
も、二度と乗つて見ようと思つた事はない。唯その時の土工の姿
は、今でも良平の頭の何処かに、はつきりした記憶を残している。
薄明りの中に仄ほのめいた、小さい黄色の麦藁帽、——しかしその記
憶さえも、年としごと毎に色彩は薄れるらしい。

その後十日余りたつてから、良平は又たつた一人、午過ひるぎの工
事場に佇みながら、トロツコの来るのを眺めていた。すると土を
積んだトロツコの外ほかに、枕木まくらぎを積んだトロツコが一輛りよう、これは
本線になる筈はずの、太い線路を登つて来た。このトロツコを押して
いるのは、二人とも若い男だった。良平は彼等を見た時から、何

だか親しみ易いやすような気がした。「この人たちならば叱しかられない」
——彼はそう思いながら、トロッコの側そばへ駈かけて行つた。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、——縞しまのシャツを着ている男は、俯うつむ向きにトロッコを押したまま、思つた通り快い返事をした。

「おお、押してくよう」

良平は二人の間にはいると、力一杯押し始めた。

「われは中なかなか中なかなか力があるな」

他の一人、——耳たに巻煙草まきたばこを挟はさんだ男も、こう良平を褒ほめてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さ

なくとも好い」——良平は今にも云われるかと内心気がかりでな
らなかつた。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、
黙々と車を押し続けていた。良平はどうとうこらえ切れずに、怯
ず怯おずこんな事を尋ねて見た。

「何時いつまでも押しっていて好い？」

「好いとも」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。
五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。其
処には両側の蜜柑畑みかんばたけに、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登り路みちの方が好い、何時いつまでも押しさせてくれるから」——良平
はそんな事を考えながら、全身でトロツコを押しすようにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。縞のシヤツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平は直ぐに飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の勻あおを煽りながら、ひたすべ込りに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずっと好い」——良平は羽織に風を孕はらませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」——そうもまた考えたりした。

竹藪たけやぶのある所へ来ると、トロッコは静かに走るのを止やめた。

三人は又前のように、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になった。爪つま先上りの所ところどころには、赤錆あかさびの線路も見えない程、落葉のたまっている場所もあつた。その路をやつと登

り切つたら、今度は高い崖がけの向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。

三人は又トロツコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走つて行つた。しかし良平はさつきのように、面白い気もちにはなれなかつた。「もう帰つてくれれば好い」——彼はそうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロツコも彼等も帰れない事は、勿論もちろん彼にもわかり切つていた。

その次に車の止まつたのは、切崩きりくずした山を背負つている、藁屋根の茶店の前だつた。二人の土工はその店へはいると、乳呑児ちのみごをおぶつた上かみさんを相手に、悠悠ゆうゆうと茶などを飲み始めた。良平

は独りひといらいらしながら、トロツコのまわりをまわって見た。ト

ロツコには頑がんじょう丈な車台の板に、跳ねかえった泥が乾かわいていた。

少しばらく時の後茶店のちを出て来しなに、巻煙草を耳はさに挟んだ男は、

(その時はもう挟んでいなかったが)トロツコの側にいる良平に

新聞紙に包んだ駄菓子ありがとをくれた。良平は冷淡に「難有ありがとう」と云

った。が、直すぐに冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼

はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。

菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみついていた。

三人はトロツコを押しながら緩ゆるい傾斜を登って行つた。良平は

車に手をかけていても、心は外ほかの事を考えていた。

その坂を向うへ下り切ると、又同じような茶店があつた。土工

たちがその中へはいった後、良平はトロツコに腰をかけながら、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」——彼はそう考えると、ぼんやり腰かけてもいられなかつた。トロツコの車輪を蹴つて見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に気もちを紛らせていた。

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木まくらぎに手をかけながら、無造作むぞうさに彼にこう云つた。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」
「あんまり帰りが遅くなるとわれの家うちでも心配するぞら」

良平は一瞬間あつけ呆気にとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年

の暮母と岩村まで来たが、今日の途はみちその三四倍ある事、それを今からたつた一人、歩いて帰らなければならぬ事、——そう云う事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きそうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いている場合ではないと思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたような御時宜おしぎをすると、どんどん線路伝いに走り出した。

良平は少時しばらく無我夢中に線路の側を走り続けた。その内ふところに懐の菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側みちばたへ抛り出す次手ついでに、板草履いたぞうりも其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋たびの裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙はるかに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路さかみちを駈かけ登つた。時時

涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪ゆがんで来る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。

竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山ひがねやまの空も、もう火照りが消えかかっていた。良平は、愈いよいよ気が気でなかった。往ゆきと返かえりと変るせいか、景色の違ちがうのも不安だった。すると今度は着物までも、汗の濡ぬれ通ったのが気になったから、やはり必死に駈け続けたなり、羽織を路側みちばたへ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。「命さえ助かれば——」良平はそう思いながら、辻すべつてもつまずいても走って行った。

やっと遠い夕闇ゆうやみの中に、村外れの工事が見えた時、良平は

一思いに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駈け続けた。

彼の村へはいつて見ると、もう両側の家家には、電燈の光がさし合つていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯氣ゆげの立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲くんでいる女おんな衆しゅうや、畑から歸つて来る男衆おとこしゅうは、良平が喘あえぎ喘あえぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門かどぐち口うちへ駈けこんだ時、良平はとうとう大声に、わつと泣き出さずにはいられなかつた。その泣き声は彼の周圍まわりへ、一時に父や母を集こまらせた。殊ことに母は何とか云いながら、良平の体

を抱^{かか}えるようにした。が、良平は手足をもがきながら、啜^{すす}り上げを啜^{すす}り上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集つて来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣^{わけ}を尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を駈け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、……………

良平は二十六の年、妻子^{さいし}と一しよに東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆^{しゆふで}を握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵^{じんろう}勞に疲れた彼の前には今でも

やはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ
断続している。……………

青空文庫情報

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年11月15日発行

1984（昭和59）年12月25日38刷改版

1989（平成元）年5月30日46刷

入力：蔣龍

校正：鈴木厚司

2004年10月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

トロッコ

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>